

# 私の中の世界

ヤマダヒフミ

# 「ようこそ」

---

「ようこそ」

花の器、言葉の境界を――

引く一本の線

そこを越えて君は扉へ

扉の中は花畑で――

君の瞳は色彩に包まれる

包まれたものが開くように

君の言葉は音を立てる

「ようこそ」・・・そう言って

君は僕を迎え入れた



世界の瞬間

眠れない夜は  
魂が離散しているのだ

言葉をかき集めて  
ほんの少しの灰を作る

それで暖をとる事も可能だろう  
全てが生成と消滅に見舞われている現在では

君は今、言葉を覚えた  
詩的言語という  
語るには最も拙劣な言語を

君は日常会話の中にも  
棘を差し挟む だからこそ君は

この世界を越えても生きていけるだろう

世界の一線を越えたまえ  
そこには君の見た事のない夕陽と美しい朝陽が  
交互に消滅と生成を繰り返す場所

君は陽となり夜となる  
君は照らし、また照らされる

「今ここ」という場所を越えたまえ  
現在の彼方は未来ではない

君の奥にいるのは透明な君ではない

君は今、詩的言語を覚えた所だ  
語るに最も適しない、そうした言語を

だからこそ君は沈黙に似た真実を  
この世界に 花瓶に入れた花のように  
コットンと置くことができるのだ

君が一線を越えたその後、世界は  
君の沈黙に見舞われる

人々は相変わらず他人共の言語で語り  
他人達の衣装を身につけ  
世界を自分流に飾り付けるが

それでも君や僕という陽と月は  
あの空を照らし、照らされる

君は僕の言葉を聞きたまえ  
僕の言葉は、君の魂のように  
少しは美しく、真実を全うするだろうから

そして世界のゆりかごの中、僕は  
月と太陽のようにいがみあいながらも愛し合いもするだろう

人々の中に変わらぬ世界があり  
僕達の中に変転する世界がある

詩は分からぬと人が言い  
僕達が詩と音楽を奏で　そして  
世界は一編の朝に似ていく　ベルリオーズの微かな旋律が  
朝陽と朝陽の間から立ち上っていく  
世界は今終わり、また始まった

「終わる」「終わる」とほざいている人々の死体からも  
一つの花びらは天に昇る

さあ、言葉を失って世界を終わらせよう  
もう一つの新しい世界の顕現へと  
僕達自身を導くその瞬間のために

鳩の世界

透明な境界線を

一人、歩く

夜の中、世界は

白んでいる

僕は今――

言葉の橋を渡ったばかり

乾いた地獄はもう十分見た

これからは地獄に立脚した

天国ばかりを夢見るとしよう

僕の「ポエム」を読みたまえ

君は笑うだろうから

僕はその君の笑みをまた

詩に読み込みから

そうして世界は今一編の詩

朝が来ても起き出さない

鳩の群のように

## 君という言葉の意味は

---

君という言葉の意味は

世界は静かに回転を続け

僕達は笑い続ける

光は夜の奴隷 それでも

全てを明るく照らすにはまだ間がある

言葉が一本の透明な線の時

君の言語は岬の突端に触れる

あの時、君が言わなかった言葉を僕は

今もまだ硬く握りしめたまま

君の事を想っているのだよ

君が全てを失っている事を想定して

失う事はいい事だ もし君に

全てを手に入れる勇気があるのなら

勇気の中にも夜があり それは言葉の中の夜に

酷似しているが

君は君の言語で話そうとしない その時、風は吹き

再び、夜という名の昼が訪れる

フロイトが無意識を探索した時、彼は

あらゆる夜の扉を開いたのだ

僕達の闇が分解されて光りになって

全てを覆う時に

君はあらゆるものを失うために全てを手に入れる

もうどんな言葉も手垢にまみれているのに 君は

自分だけの言語を手に入れようとして

死ぬ

そしてその死体が人類至上初めての

本物のオリジナルな言語なのだが

人間の盲目の目にそれは写らず

僕の涙の端を僅かにかすめてそれは意味を失い そして

世界を崩壊させるに足る 一すくい

灰を生み出す

世界は灰となったから 灰を再生させるのは  
新たな炎だろう 炎を消すのは水ではなく

死体だろう その言葉が意味を持って  
君となる

第六感に頼りたまえ たまにはこの世界にも  
微風が吹くさ

君がそこにいるなら君は  
全てを感じ取る事も可能だ

この僕の存在とこの僕が感じ取った事さえ  
感じる事もまた可能だ

さて、そろそろ終わりにしようか  
世界は意味に溢れている故に

君の意味に気づかないから

見えない神

未来は常に遠く  
過去は常に近い

あの成層圏から吹いてくる風も  
常に君を見下ろしている

大型の夜がやってきて  
全てを嵐に変えてしまう時

君の瞳は閉じられ  
まだ見えない神を呪っていた



## 夏の匂い

夏という透明な雫

空の匂い——光の中で

あなたはいた

少女は往年の片時を忘れず

中年は幼時の微笑みを忘れて

時は進む

「ガラスは砕かれた玻璃の名残りだ」と

誰かが言う

その言葉は乾いた言辞の中を

優しい旋律のようにならねって進む

風は樹と樹の間を巧妙にすり抜け

あなたの下へ

あなたは飛んでいこうとする帽子を押さえて

その時、ようやく始めて

夏の匂いを嗅いだ

## 私の世界の中の私

あらゆる言葉が難解な象形文字である時  
私は私の言葉達を塞ぐ  
私の言葉が流れないように  
そして外部の言葉をせき止め  
私は少数の過去からの語り人達の  
誰よりも沈黙を願った言葉達を採り入れる

あらゆる音楽が不可思議な旋律に思える時  
私は私の心の耳を塞ぐ  
世界はできの悪いスピーカーだから  
私は心のチャンネルを合わせて  
遊星からの声を聞く

あらゆる映像がコマ送りの自殺者の見るスローモーションの時  
私は私の目を殺す  
世界にはこんなに映像が溢れているのに  
そこに私が映ると、その瞬間、私は他人になってしまうから  
私は私の心の中にしかない孤島を  
私の心の中にしかないカメラで映す  
そこには誰も映っていない  
それが私の心だから  
だが、それでもその映像の最後には  
美しい蝶が一匹舞い  
結局、それが私なのだ

私は私の言葉で満たされ  
私は私の音楽で満たされ  
私は私の映像で満たされる  
世界が今、一つの模造の世界である時  
私は私の鼓動を聞くように  
私の世界の中で存在している

前に進もう

風、騒ぐ  
浪は立ち

君は冷静  
世界は平静

世は暗く  
我が魂も暗く

君の涙が  
紅く光る・・・

この世を一閃薙ぎ払う  
巨人の斧は

僕達の中で夢と潰えて  
消えていった・・・

君、歌う  
君の歌を

僕、叫ぶ  
僕自身の魂を

君は孤独を  
僕は和合を

共に糧にして  
さあ、前に進もう

## 知っているか？

---

知っているか？

知っているか  
言葉達を？  
決して君に語られる事なく  
死んでいった無数の言葉達を？

知っているか？  
死んでいった者達を  
僕達が見なかった為に死んでいった  
無数の命を？

知っているか  
一つの宿命を？  
誰にも見られる事なく、それ故  
自分自身の道を全うしたそうした宿命を？

知っているか  
君自身を？  
君がまるで君と関係ない事にうつつを抜かしている間  
泣いている君自身を

知っているか  
僕を？  
ここで歌っている  
僕という存在を

知っているか  
君は君を知っているか？  
君は僕を知っているか？  
君は世界を知っているか？

そして、それらを  
愛した事があるか？

# 夏は振り返らない

---

夏は振り返らない

夏、  
空に近づく

心の中で緩やかに  
時は流れる

相対性理論の誤ちに気付いた後  
人は再び原子爆弾を落とす

それは宇宙から見れば  
小さなかわいい線香花火 だから僕は

宇宙に小さな小さな灯を点す  
僕の希望を天に掲げて

その間も夏は走り去り  
後ろを振り返る事は決してしない

# 重力に抗して

---

重力に抗して

鳥は  
重力に抗して空に舞う

ロケットもまた地球の引力に反して  
宇宙に飛ぶ

さて、人は  
人の叱責に打たれ あるいは 人の暴言に傷つき  
死んでしまったりする  
その時、人は他人という重力にひきずられて死んでしまう存在  
だから、この重力を打ち破って  
強く強く飛ぶ必要がある

人がどんなに「ムリだ」「ダメだ」と言っても  
できるものはできるのだ



一陣の風

私はここに存在している  
どんな時も  
あなたが頁をめくれば

私はここに存在している  
あなたが笑っている時もあなたが泣いている時も  
私は笑っているあなたを泣いているあなたをここから見ている

私はここに存在している  
あなたが私を不要になった時も  
私は依然、ここに留まって存在している

そしてあなたが死ぬときも 私が死ぬ時も  
私はここに存在している  
紙に括りつけられた一陣の風として

## 精神という現実

精神もまた一つの現実である  
現実主義者はあるものだけを「現実」と呼ぶが  
精神もまた一つの現実である  
人の思念の中にあるものが実現されて未来となる  
もし人の思念を現実でないと斥けるなら  
君達に一体何ができるか？  
この世界とは一体何であるか？

## 肯定のあなた

否定と廃頹の中  
私は肯定のあなたに出会った  
あなたは無数の「ノー」をいとも簡単に  
「イエス」へと捻じ曲げる  
あなた自身がたった一歩、前に進む事によって

生きること

死ぬのを拒否すること

生きながら死ぬのを

拒否すること

おかしを食べること

あなたを想うこと

様々なものに出会い、感じ

そして何かを表現すること

生きながら死んでいる亡者達を

拒否すること

生きる事を謳歌している人々と

出会う事

羨望、妬み、憎しみ、愚痴、それらを

峻拒して

美しいものを美しいままに崇めること

でも、時々それらができずに

少し、諦めること

でも、それでも少しずつ

前に進むということ

生きること

明るく朗らかに

明るく朗らかに  
生きようではないか  
内に辛酸の限りを舐めた  
本物の痛みを抱いて

明るく朗らかに  
笑ってやろうではないか  
それで偽物の明るさを  
ぶっ飛ばしてやろうではないか

明るく朗らかに  
前進しようではないか  
この困難と見える人生を  
明るく輝かそうではないか

育てる花

君が何も愛さないなら

君は何からも愛されないだろう

君が世界を笑うなら

君は世界から笑われるだろう

君が花を踏みつけるなら

その花の痕は永遠に君の足裏に残るだろう

だが、人はその踏みつけた足を使って

一輪の花を育てる事も可能なのだ

### 平和の成功

「破滅」の言葉が破滅へと  
「愛」という言葉が愛へと至る時  
人々の顔はにやついている  
自身の幸福と平和が実現されたと  
一人ほくそえんで  
無数の無罪の死体を土裏に埋めれば  
それで全ては成就されたと確信して  
今、僕は死体の一人 だから問おう  
あなた方の平和とは裏に無数の罪なき戦争を隠した故に  
実現した平和ではないか？  
人々の答えは一つ 余計な事を言う余計者を  
土裏に埋めて これでもた  
平和の一丁あがりなのだ、と

### 詩の世界

夜の帳を開けて  
一人進む  
詩の世界は詩の中に発見せよ、と昔  
誰かが言った  
もちろんそんな掟は誰の目にも無意味  
みんな意味ある所、即ち自分の欲望の範囲内で  
詩を探そうとする  
おそらく詩という高貴な調べが  
最も低俗なものより快い音を奏でるという事を  
人々はまだ知らないのだ



記念のキス

太陽が昇ると

心が静かになる

夜が来ると

世界は新たになる

暗い中にも

生まれる何ものかがある

世界がざわついている今も

息づいている雑音がある

人類が消滅した後も

やはり太陽は回っている

私はその記念に

君にキスをした

# まだ聞こえる

---

まだ聞こえる

目を閉じても

まだ音楽が聞こえている

私の臨終の時、私の耳には

まだあの頃の小川のせせらぎが

聞こえている

目を閉じても

まだ音楽が聞こえている

あの時の君の囁きも

あの時の君の笑顔も

全部聞こえている

目を閉じても

まだ音楽が聞こえている

私の死んだ後の葬式の時の

モーツァルトだって聞こえている

## 私の世界の中の私

<http://p.booklog.jp/book/55372>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55372>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55372>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ